

「産科医療に復帰して」
最適なライフワーク
バランスを目指して」



琉球大学医学部附属病院
周産母子センター

叶 三千代

琉球大学は平成21年度に文部科学省の周産期医療環境整備事業に「周産期医療専門医育成プログラム」という名称で応募し、承認されています。周産期医療専門医を育成することが目的ですが、その中に女性医師の就業継続と復職支援も加えられています。女性医師が復帰しやすい様に、これまで大学附属病院では認められていなかった週30時間の医師のパートタイム勤務が認められる事になりました。私は今回この制度を利用して平成21年9月に卒業後15年ぶりに大学に戻って産科・周産期医療に復帰しました。復帰までの事情とその後の身の周りの変化を含めて報告します。

24歳で大学を卒業後、一年だけ中部病院でインターンをして翌年の平成7年に琉球大学の産婦人科に入局し、大学人事で当時の県立那覇病院、中頭病院、那覇市立病院などで研修を行っています。その後大学に戻り、産婦人科認定医を取得しました。その間結婚、長女出産を機に大学を退職しました。その後は2歳違いで長男、次男を出産し、その間一度だけ常勤扱いで約1年勤務しましたが、それ以外は開業医の先

生のもとで外来診療のお手伝い程度のパートを繰り返してきました。

パートで外来のお手伝いをしていると仕事の時間以外は患者さんや仕事に縛られる事がなく家に帰れば子供の世話や家事に専念ができます。しかも普通の主婦のパートに比べたら格段の待遇ですから、子供との時間や家事の時間が欲しい主婦にとっては最高の境遇です。それがどうして大学で研修を始める事になったか、色々な方に質問されます。

私が復帰研修を始めた動機について色々あるのですがいくつかまとめてみました。

まず一つには、社会的な要求として昨今の医療崩壊、とくにその中でも顕著な周産期崩壊、医師不足があげられます。連日のように疲弊した周産期医療についての報道があり、医師免許を持ちながら“のほほん”と暮らしている自分にも、その原因があるのだという自責の念は禁じえません。週に数回のパート外来は、患者さんに対しての責任がほとんどなく、ストレスからは解放されます。しかしながら、技術の進歩がないばかりか、能力の衰えを感じ、医師として外来に立つこと自体が患者さんに申し訳なく、自信を持って診療できない自分に気が付き、鬱々と過ごしていました。

また、一般の主婦のパートに比べれば格段に良い時給ですが、それでもパートはパートで先々の保証は何もなく、高額な国民年金や国民健康保険税を毎年毎年支払う度に、何とかせねばと思っていました。

そして、一番末っ子も保育園へ通い、授乳も終了すると、昼間の空いた時間はただ空しい時間となっていきました。それに加え、子供たちのために仕事を制限しているという意識が、知らず知らずのうちに子育てに完璧を要求し、気づけば子供を支配しようとする親になっていました。小さい間は傍に寄り添ってあげるのが一番だという考えでそうしてきましたが、今後は私が働く後姿を見せるのも一つの手かもしれない、と子育てに関する考えも変化してきていました。

外来の患者さんとの人間関係に関しても、主治医として関わっていない関係上、自分の診療行為に対しての対価は給料だけであり、診療行為から反省や達成感を得られることはほとんどなく、医師としてはとても寂しいと感じる様になっていました。

そんな中で、大学の若い先生方が実に生き生きと仕事をこなし、青木教授を中心に活気のある医局の雰囲気に惹かれ、また同じ様に子育てをしながら仕事をこなす同年代の女医に言われた“自分で患者を診ないと結局勉強にならない”とのセリフや、医局長の“いくつになっても勉強に遅いことはない”というセリフに後押しをされ、迷いに迷って、実に何カ月もかかって決断しました。

大学での研修は色々な事が新鮮で刺激的です。若い時と同じ体験でも、出産、育児を経験し、歳を経た今は、一味ちがった受け取り方ができ、仕事が楽しく毎日充実しています。また少し距離をおいて子供と接する分、今まで以上に子供が私に対して優しくなり私もより一層子供が可愛く、そしてより愛しく感じられる様になりました。

医療崩壊で勤務医が激務に耐えられなくなりどんどん辞めていくという報道を目にします。

突然の病気で長期休養せざるを得ない先生、あるいは仕事優先で家庭崩壊を招いた先輩などがおり、男性女性に関わらず自分の健康を維持し、家庭崩壊を招かない様な働き方を考えるべきではないでしょうか。

私自身のこれまでを振り返ってみると仕事以外考えられない20代と、育児・家庭の基盤を築いてきた30代でした。そしてこれからの40代は自分にとって最適なライフ・ワークバランスをみつけ、維持することが課題だと思っています。長期間同じスタイルで働くのが無理でも試行錯誤を繰り返し、子供の成長段階に応じたスタイルで仕事を続けて行きたいと思います。

最後に、私の世代は外来パート勤務をしている女医が多いのですが、その中には勉強したいという気持ちがあっても、なかなか一步を踏み出せずにいる友人がいます。そんな中私の恵まれた環境を思うと私を受け入れてくれた琉球大学の復帰研修制度、および青木教授はじめ医局の先生方、卒後年数からは指導的立場を期待されるはずなのになかなか役に立たない私を直に指導して下さっている佐久本薫先生に感謝の念を禁じえません。この場を借りてお礼を述べさせていただきます。どうもありがとうございました。そして今後もよろしく申し上げます。

原稿募集！

プライマリ・ケアコーナー(2,500字程度)

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。
奮ってご投稿下さい。